

## 道徳科 よりよい未来を「そうぞう」するために、自己の生き方についての考えを深める子ども ～問題を自分事として捉えて、未来への見通しを持つ道徳科の授業～

寺西 克倫

### 1. 道徳科における未来そうぞう

未来を「そうぞう」する子どもの育成に向けて、答えのない問題にも納得し合える納得解を導き出すことが必要である。そのためには、問題を自分事として捉えたり、他者と対話して多様な価値観を肯定的に受け入れたりして、よりよい未来を「そうぞう」するための道徳性を養うことが求められている。その道徳性を養うために、道徳科では、道徳的諸価値の理解をもとに、物事を多面的・多角的に考えながら、自己の生き方についての考えを深めていく学習を行っていく。この学習で養う道徳性とは、道徳的な判断力、道徳的な心情、道徳的な実践意欲と態度の要素で構成される道徳的諸様相である。

これまでの研究で、未来そうぞう科の内容と関連する主題を道徳科の学習で扱っていると、道徳的な問題に迫ったり、直後の未来そうぞう科の活動を想起したりすることが容易になることが分かった。また、発問を精選して構造的な板書を心掛けることで、自分たちの思考の流れをふりかえりやすくなった。しかし、未来そうぞう科での活動に関連する道徳的価値の問題を直接的に考えると、一面的な理解にとどまって道徳的な価値の理解を深めにくいことや、問題を自分事として受け止めるには個人によって差が出てしまうこと、さらに、他者と話し合いはするが、その中でよりよい生き方に対する考えがあまり深められてなかった、といった課題が残った。そのため、未来そうぞう科の学習との関連の図り方や、自分事として問題の捉え方、対話の中で道徳的価値の理解の深め方について明らかにしていく必要がある。

道徳科の学習は、自分自身で道を切り開き、前を向いて生きていく力を育てていく未来そうぞう科の学習（現状を把握した上で、その現状がよりのぞましいものへと変容した姿を思い描く「想像」と、新しく行動をおこしたり、新しいものを生み出したりする「創造」を繰り返しながら、対象に対して向き合っていくプロセス）と似ている。つまり、道徳科と未来そうぞう科は、よりよい未来や生き方への見通しをもち、それらを実現するための問題を考え、実践することへの意欲と態度を養うという点では同様である。そのため、道徳科で考えたことを未来そうぞう科の学習につなげて活かしたり、未来そうぞう科での活動を道徳科で振り返って考えを深めたりすることは可能であり、道徳科の時間に道徳的価値について考えたことや自己を振り返ったことを、未来そうぞう科の内容につなげていくことができる。

以上のことから、道徳科における「めざす子ども像」を「よりよい未来を『そうぞう』するために、道徳的諸価値に関わる事象を自分事として受け止め、その解決と実現に向けて、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める姿」と考え、研究を進めることとした。

### 2. 「未来そうぞう」と教科との関係

#### (1) そうぞうの実践力につながる姿

各教科等は、6年間をかけて「そうぞうの実践力につながる姿」をめざし、次期学習指導要領に沿って従来通りつきたい力をねらい、実践に取り組む。道徳科においては、『よりよい未来を「そうぞう」するために、自己の生き方の考えを深める子ども』を表1に定義し、人間としてのよりよい解決を行うために、自分の意志や判断に基づいて自己実現を図ろうとする道徳性と「そうぞうの実践力につながる姿」を以下のように想定した。そして、道徳的諸価値に関する問題を自分事として受け止めて、自律的に判断したり、粘り強く問題を解決したりしようとする道徳性の「主体的実践力につながる姿」と、他者の多様な考え方や

感じ方に触れて、よりよい集団や社会の形成につながる道德性の「協働的实践力につながる姿」を両輪として発揮させ続けて、「そうぞう的实践力につながる姿」を育成していく。なお、「そうぞう的实践力につながる姿」は、6年生の卒業段階を想定したものであり、各学年の発達段階や主題を考慮し、学習指導案に明記する。

表1 「よりよい未来を『そうぞう』するために、自己の生き方についての考えを深める子ども」

【そうぞう的实践力につながる姿】	
よりよい未来を「そうぞう」するために、道德的諸価値に関する問題について、人間としてのよりよい解決を行うために、自分の意志や判断にもとづいて未来を見通して自己実現を図ろうとする道德性。	
【主体的实践力につながる姿】	【協働的实践力につながる姿】
自己の生き方についての考えを深めるために、様々な道德的諸価値に関する問題を自分事として受け止め、自律的に判断したり、粘り強く問題を解決したりしようとする道德性。	他者との関わりや集団や社会との関わりの中で、自らが他者と共によりよく生きようとするために、他者の多様な考え方や感じ方に触れて、よりよい集団や社会の形成につながる道德性。

## (2) そうぞう的实践力につなげるための手立て

### ① 自分事として受け止める「場」の工夫

知識を理解しただけで道德性を養えるわけではなく、正しいと分かっているにもかかわらず実生活では実現することが難しい場合もある。そこで、道德的な「学び」の場として、道德科では、子どもたちが「教材」「自分」「他者」と対話しながら、自己の生き方についての考えを深めて納得解を見出せるようにする。

まず、「教材」から道德的価値に関わる問題を把握する。その問題場面では、登場人物の立場に自らを置き換えて考えたり、登場人物の心情や行動を分析して考えたりして、自分の道德的価値を客観的に見つめていく。この思考の中では、これまでの自分の経験やその時の感じ方、考え方と照らし合わせることで、さらに道德的価値の理解や自分の考えを深められるようにする。

また、問題の解決に向けての自分の考えを整理したりまとめたりすることができたら、友だちと意見を交流し合う。多様な価値観の存在を前提に他者と対話したり協働したりすることで、「新たな考え方が分かった」ということを増やしていく。ここでは、一つの答えを求めたり決めたりするのではなく、様々な視点から物事を理解することで、主体的に学習に取り組めるようにする。そのためには、一人一人が本音で語り合える学級経営が必要であり、自分の意見だけでなく、友だちの意見を取り入れて物事を多面的・多角的に考え、「自分」と対話して自らの考えを再構築できるようにしていく。

このように、他者と関わりながら対話的に考えることを通して、互いに望ましさを共有し合った道德的な望ましさを、自分事としてどのように受け止めるのかという納得解を紡いでいく「場」を設定する。

### ② ねらいにせまり、道德的価値と「そうぞう」をつなぐ発問づくり

道德科の時間に、自己の生き方についての考えを主体的に深めていくためには、子ども自身が問題意識を持ち、問題解決の流れが大事にされた授業展開が重要である。主題に対する道德的価値について、きれいごとで理解するのではなく、主人公の悩みや人間としての弱さなどを明らかにして、自分の本音の気持ちの部分で考えていくために、発問を吟味して精選し、子どもたちの気持ちを揺さぶっていくことが求められる。そのため、子どもたちが、「当たり前だ」「分かりきっている」と思い込んでいる事柄を「分かっていたいなかった」と気づき、「本当なのか」と立ち止まって考えていく発問構成が必要である。

具体的には、登場人物の気持ちを考えるだけなどといった一面的な理解にとどまることなく、登場人物に対する多様な立ち位置を意識できるように、発問を組み立てていく。例えば、教材のテーマとそれに対する考えを問うことで、道徳的価値のねらいに迫り、生き方についての考えを深めていくこともできる。特に、自分なりの考えを客観的にもてるように、「どうしてなのか」などと登場人物の考えや行動の理由や根拠を分析的な発問を効果的に活用して、道徳的価値の本質や問題解決の難しさを考えていく。

### ③ 考えを整理し、道徳的価値の理解を深められるような板書

子どもたちが、視覚的に自らの考えを整理し、道徳的価値の理解を深めたり、物事を多面的・多角的に考えたりできる道具が板書である。そのため、板書を効果的に活かしていく。

具体的には、本時の学習で、最も考えさせたいところ（話し合わせたいところ）を中心に板書を構成するようにして、登場人物（主人公）の考えの変容などを対比し、心の動きが分かる構造的な板書を考えていく。そうすることで、1時間のねらいである道徳的価値が明確になり、子どもたちはその価値についての理解を深めやすくなったり、自分の考えと比べて、様々な視点から物事を考えやすくなったりする。また、多様な意見が出る場合は、似たような意見をまとめたり、対立する意見を際立たせたりするなど、視覚的に整理することで、後で振り返った時に、友だちの意見と照らし合わせて、自らの考えを整理することができるようになる。

### ④ 未来そうぞう科と関連を図る道徳科の主題設定

未来そうぞう科の学習につながる内容を道徳科で学習し、未来そうぞう科と道徳科の関連を図っていく。道徳科の主題と未来そうぞう科の単元が直接的につながらず、間接的に関連する主題もあるため、道徳科の時間に未来そうぞう科の学習をつなぐものが必要になってくる。例えば、道徳科で学習する教材に載っていて、様々な想像ができる言葉や、何かにあるものが例えられているものなどが考えられる。道徳科で登場人物の心情などを様々な角度から想像することで、未来そうぞう科での具体的な活動を「想像」しやすくなり、道徳科の時間に、道徳的価値についての問題を多面的・多角的に考えることで、道徳的な判断力が育まれ、未来そうぞう科の「創造」の活動での実践が充実する。こうして、道徳的な問題を多面的に考えていくことで、よりよい未来を「そうぞう」していくための道徳性を育成していく。

このように、社会や世界と関わろうとしたり、これからの生活に活かしてよりよい人生を送ろうとしたりする未来そうぞう科の活動につながると、道徳科で学習したことが具体的な実践の場となり、よりよい未来を「そうぞう」することにつながっていくと考える。そのため、未来そうぞう科の学習と道徳科の主題の関連を図ることで、道徳科の時間に考えた解決方法を実践する場を意識することができ、道徳的実践意欲と態度をより育むことができると考える。

## 3. 道徳科における評価について

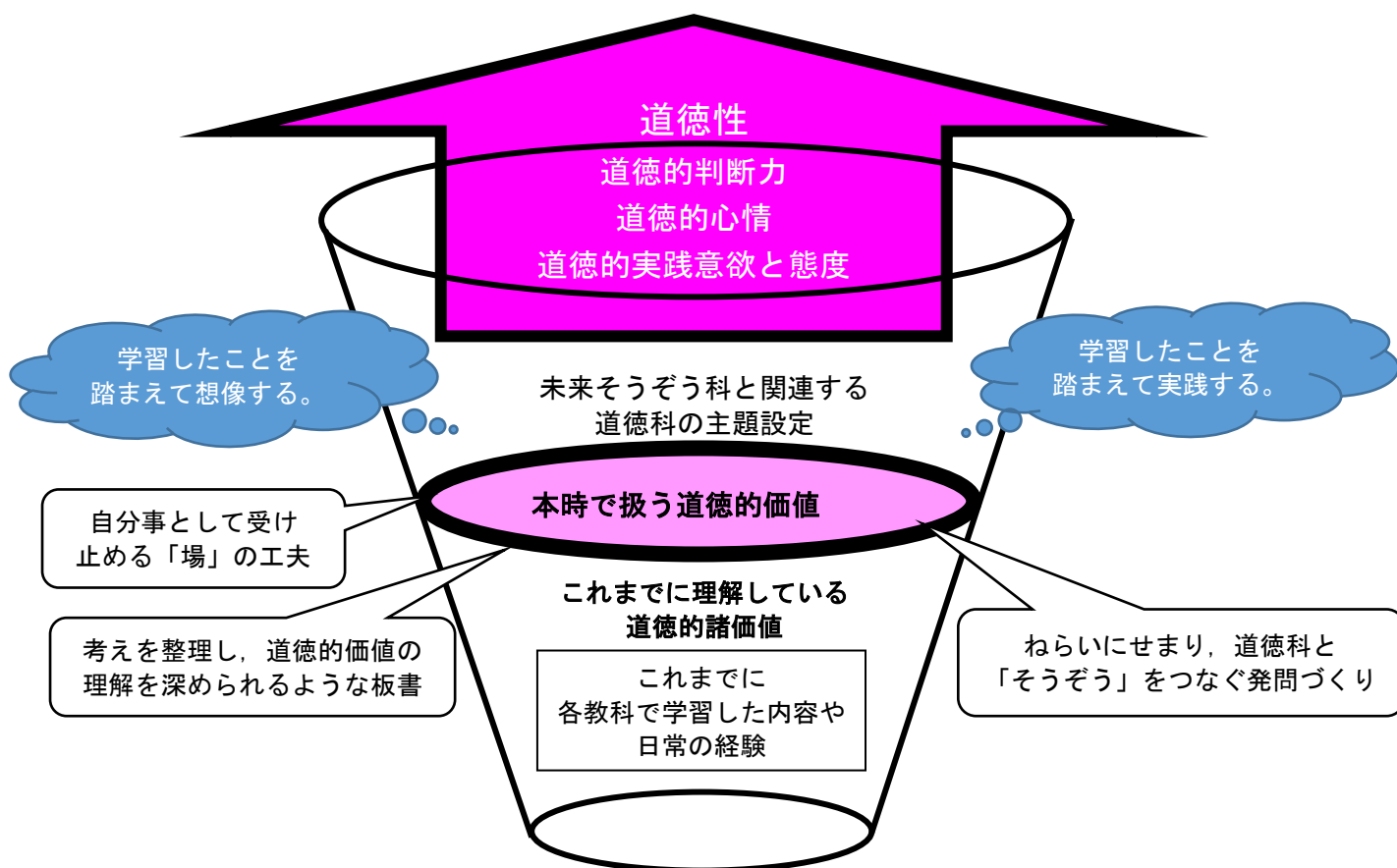
道徳科の評価は、「人格的資質を形成する道徳性を成長させる学びを見取る」という側面がある。道徳性は、あくまでも個性的なものであり、外からでは推し量れない個の内面に形成される資質・能力である。学習展開のどの部分でどのような学びを配置するかという授業デザインと、子どもの学びをどのように見取っていくのかという授業評価の観点が必要になってくる<sup>2)</sup>。評価の観点を明確にするためには、授業のねらいがより具体的でなければならない。

評価をするにあたって、話し合い活動を通して、一面的な見方から多面的・多角的な考え方に発展しているかという点と、自分自身の道徳的価値の理解を深めているかという点に着目する。これらの観点で

評価するために、道徳的な問題を解決するための話し合いの発問部分に自分の考えをワークシートに書き、学習の終わりには、1時間の学習でじっくり考えて分かったことを書くようにする。このようにして、自分の生き方についての考えを深めているかを把握する。また、未来そうぞう科と関連する道徳科の主題を学習する時は、未来そうぞう科の子どもたちの姿の変化で、道徳科で考えたことがどのようにつながっているのかを評価する。そのために、未来そうぞう科の子どもたちの記述や発言などを記録する必要があり、道徳科でどんなことを考えさせるのかが重要になってくる。

#### 4. 道徳科の全体構想図

よりよい未来を「そうぞう」するために、自己の生き方についての考えを深める子ども



#### 【引用文献】

- 1) 永田繁雄「道徳教育 2014年8月号」, 明治図書, 2014, p.4~p.6.
- 2) 田沼茂紀編「道徳科授業のつくり方 パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価」, 東洋館出版, 2017年8月.p.114.

#### 【参考文献】

- ・ 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門会議『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）」, 2016年7月.
- ・ 永田繁雄編『「道徳科」評価の考え方・進め方」, 教育開発研究所, 2017年6月.
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』, 2017年6月.
- ・ 和井内良樹「道徳教育 2017 10月号」, 明治図書, p.4~p.6.
- ・ 赤堀博行『「特別の教科 道徳」で大切なこと』, 東洋館出版, 2017年11月.
- ・ 坂本哲彦「小学校 新学習指導要領 道徳の授業づくり」, 明治図書, 2018年4月.